
からくりサーカス外伝-銀の月-

藤田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

からくりサーカス外伝 - 銀の月 -

【Nコード】

N3551L

【作者名】

藤田

【あらすじ】

これは、一人の人形破壊者の物語。

語られることのなかった、数多の中の一つ。
そんな物語である。

序幕・サーカスの終わりに

おや、あなた・・・。

.....?

そう、そのあなたです。

サーカスはもう終演しましたが、如何なされましたかね？

.....。

何、まだ楽しみ足りないと・・・！

これはこれは、欲張りなお客さんもいたもので・・・。

.....っ！.....っ！！

いえ、恥ずかしがることではございません。

ふむ、ではお客さんのためだけに一つ、簡単な催しものでもしまし
ようか・・・。

.....！！

いえいえ、総てのお客様に楽しんで頂くことこそ我らの喜びでございます。

.....。

それでは、今一つお楽しみ下さい。

今宵、観客はあなたお一人限りのサーカス。

演目名は銀ぎんの月つき。

第一幕 その男、銀にて

キラキラ
綺羅綺羅と光り輝く無数の星々。優しく包みこむような光の銀の満月。暗い闇の中で月の光を浴びて歩く一人の男。それはまるで暗がりの中の舞台上で、スポットライトを当てられた主演のよう。

目の前に遙かに広がるモンゴルの大平原を静かに、だが確実に近付いているという実感を持って自らの足でしつかと歩み進む。その隣には右手で持った大型で銀色のトローリーケースが音もなくその側を付き添っている。少し汚れたターバンを頭から無造作に巻き、鼻から膝下までを隠すように大柄な緑のマントで覆った姿。足元にはカーキ色のタオスシューズがうつすら見える。

ふと男が歩みを止めた。そして、今まで少しうつむき気味であった視線を地平線へと向ける。

「・・・あそこか」

視線の先には小さな灯。常人では見逃してしまう程の光の粒が、ポツポツと闇に浮かんでいる。それを見た男はクククと身をよじる様に笑うと、さも嬉しいような様子で呟いた。

「幾時、幾日、幾月、幾年、この時を待ちわびたことか・・・。やつと・・・やつと“しろがね”になった目的を果たせる」

男は見えない口の端をゆっくりと持ち上げると、まるで、恋人にで

も逢うかのように微笑む。だが、その瞳は鈍色に輝き、吸い込まれ
そうな狂気を孕んでいた。

第二幕・白金の男

「せんせえっ！」

もうそう呼ばれて何十年になるであろうか。小麦色の肌の丸い瞳の男の子、バヤルが笑いかける。

それを見た私は彼の頭に手を乗せると、そのよく跳ねた黒髪をゆっくり撫でる。

「バヤル、どうかしましたか？」

私は今、どんな表情をしているのだろうか？

頭を撫でられつつ気持ちよさそうに目を細めるバヤルにそう尋ねると、思い出したかのようにバヤルはこちらを見直し、嬉々として答えた。

「あのね、先生は僕達と肌の色も違うし、髪の色も眼の色もきれいな白金色だけど、異人さんなの？」

しろがね、我らにとって忌々しい響きの色。だが、その色を生まれながらに宿す私。いや、正確には我らが創造主によって色をつけて頂いたものである。

何よりも美しく、麗しく、そして愛しい彼の方。その方の愛した・
・白金。

私はその白金の瞳でバヤルを見つめると、ゆっくりと口を開く。何度も聞かれた台詞に、いつも通りの答えを澁みなく紡ぐ。

「『そう、私はここから遙か遠く。普通の人では辿り着けない場所から来たのですよ』」

それを聞いたバヤルは上手く言葉の意味が理解できないのか、一瞬こちらを見たまま静止する。そして、またいつもの“笑顔”を浮かべると私に言葉を返す。

我らが創造主よ

「なら、やっぱり先生は異人さんで、しかも普通の人より凄いだ
」！」

それはどこか自分の事のように誇らしげで、嬉しそうな表情。

私はあなたにお伝えしたい

何度目であろうか。私の機械の胸の内に、温かいものが広がっている。それはじわりと全身に心地よく広がり、なんとも言えぬ幸福感に私は満たされる。

「そうですね。私は普通の人とは少し違います」

11の

「そっか、異人さんなのか。だから先生は物知りなんだね！やっぱり先生は僕達マウリ族全員の大事な先生だ。もっと色々な事を教えてよ！」

“感情”を

第三幕・相対する白金と白銀・

星々の煌めきも陰る丑三つ時。5つほどのゲル（遊牧民が住む家の事。組立て式でサーカスのテントを小さくしたような形をしている。）集落から約300m離れた地にて、二人の男が相対していた。一人は人間であり、もう一人は・・・

「随分すんなりと出て来たな。まるで、俺の存在に気付いていたみたい。それにしても随分と人間臭い恰好をしているじゃないか、オートマト自動人形ア。貴様、狙いはなんだ？」

ターバンを巻いた男がドスの効いた声でそう脅す。全身からでる圧力、そして不可解とも言える喜びの感情。例えるならそれは戦う理由を見つけた修羅のよう。

相対するプラチナブロンドの男。白磁のように白い肌に端正に整えられた顔。腰まである髪に180cmほどの長身。長い手足だが灰色のデール（モンゴルの遊牧民が着る民族服。厚手の浴衣に立て襟がつき、袖に長い折り返しついたような形をしている。）を纏っているためその体格はわからないが、おそらく華奢であろう。獣の革で造られたブーツを履いたその衣装は、西洋風の容姿に反して完全にモンゴルの民のものである。

「しろがねよ。私の目的は、フランシーヌ様に笑顔をもたらすこと、そして人間を守ることだ。もしも戦いになれば巻き込んでしまう。出ない訳には行くまい。それに、だ。あれ程私に対して殺気を送りつけていれば嫌が応にも気付くさ」

オートマト自動人形と呼ばれた男は、ターバンの男が放つ威圧感をそよ風が頬を撫でるかのように受け流し、淡々とした口調で話す。その内容に

ターバンの男は激昂。

『ざわっ……!』

周囲の空気が一瞬震えたかと思うと、更に重々しくなっていく。

「……
人間を守る？自動人形が？」

そして、男を中心に集束していき……

「ふざけるな……ふざけるなツツ!!!」
爆発した。

「貴様は我が友を殺した!!その相棒さえ奪いッ!!そんな貴様が人間を守るだと!?戯言もいい加減にしろツツツ!!!」

男を中心に、暴風が巻き起こるような怒気。全てを薙ぎ倒す攻撃的な気。男の眼がぐるぐると終わりのない渦を巻くように光を失っていく。

何者も口を挟めない、断固とした怒り。だが自動人形は彼の放った台詞の中に奇妙な違和感を覚える。

「待て、しろがねよ。私は誰も殺した覚えはないぞ」

その一言に、ターバンの男の中の何か切れた。そして、先程までの怒りが嘘のように引いていく。それは、大津波の前に潮が引いていく様に似ていた。

上を向き、その銀の瞳から静かに涙を流す男。ただただ静かに涙を流すと、一言……

「殺す」

第四幕・跳ぶ者・

一瞬、まさに一瞬。

ターバンの男が右手に持っていたトロリーケースを体の前に移動させると同時に、その側方に指を差し込んだ。

「スプリングルド、アクションツツツ!!!」

男が声をあげると、それに応じるかのようにばかりとケースが開き、黒い影が闇に躍り出る。

黒いシルクハットに、毛先が丸まった金の長髪。燃える丸い瞳に笑ったようにその口角があがった口からはチロチロと青い炎が漏れている。

首から下半身まで届く黒いインバネスコート。腹部あたりには少し離されて巻かれた二本のベルト。白い蛇腹の腕に鋼鉄の爪。2mを超える長身と異様に長い四肢だが、その中でも最も目を引くのが黒いポトムズの膝あたりから覗かせる・・・バネ足。

鈍く輝くその足は、まさに跳ぶ者スプリングルドにふさわしい異質感と存在感を放っている。

『あきやきやきやきやきや!!!』

スプリングルドと呼ばれたそれが地面に音もなく降り立つと、いきなり笑うかのように身体をのけ反らし、気が狂ったようにけたたましい声をあげる。鳥の鳴き声のような、子どもの笑い声のような甲高い響きが四方に木霊する。

「こいつが貴様を倒す懸系傀儡トモネツだッ！行け、スプリングルド!!!」

男がそう告げると共に、指を動かした。十指には指輪のようなものがついており、そこから懸糸傀儡に向かつて長い糸が伸ばされている。それが男の指の動きに応じて張りの強さを変えていく。糸から動きを伝えられたスプリングルドはそのバネ足で地面を思いきり蹴りつけると、弾丸の如き速さで接近。右手の爪を突き出し、的を貫こうとする。

「くっ！」

間一髪。自動人形はギリギリで左に飛び退きなんとか回避をするも、先程までいた場所がいとも簡単に抉れるのを目の当たりにする。

(このままでは、勝てぬ・・・か)

地面につくまでのコンマ数秒。自動人形は今の一撃を分析し、次の行動を模索。頭の中の歯車がきゅるりと高速回転するのを感じる。そして行動決定。着地と同時にそれを実行。

.. 逃げる..

合理的な判断と機械的な行動。背を向けてその場、その所から走り去ろうとする。だが、そこに一瞬自動人形には有り得ぬ“感情”が入ったために動きが半歩遅れる。

(ここで逃げれば皆はどうなる?)

集落にいる者達の未来を心配する一瞬。そしてその一瞬の遅れが致命的となった。

「逃がすか！スプリングルド、フラッシュアップフラメ炎の矢！」

腕のバネの伸縮を使った高速のピストンによる秒間12回の突き。背を向ける相手には十分過ぎる脅威。

自動人形はギリギリで体をひねるも、数発をかすりにするだけでそ

のほとんどが無防備な背に直撃。前のめりに地面に叩きつけられ、反動で空中に舞い戻ると、勢いのまま背からまたも地面へと叩きつけられる。乾いた砂埃が舞い上がり、自動人形のいた辺りが砂煙に包まれた。

第五幕・勝者と交渉

「オイ・・・まさか、この程度で終わりなのか？」

ターバンの男は不審がるように、失望したように自動人形が倒れた地点を凝視し続ける。やがて砂煙が晴れると、そこには変わらず倒れたままの自動人形がいた。

その姿に若干の驚きと、あまりの味けのなさに急速に冷めていく自分がいることを男は自覚していた。

「なんだ、こいつは？いくらなんでも弱すぎる・・・本当に、アイツを殺した自動人形か？」

男は様々な可能性を考える。そして最も可能性が高いのが騙し討ちだが、そんな事をする者であればそれこそ懸系傀儡マリオネットを出す前に行っているであろう。わざわざ今傷を被ってまでする必要などない。今更死んだふりなど、馬鹿馬鹿しいにも程がある。だからこそこの結論。ただただ単純に、“弱い”それである。

「だから違うと言っているであろう。私は、人間を攻撃できるよう・・・造られていない」

男がふと口にした疑問は不意に答えを返され、一瞬身構える。だが、大の字になったまま一向に動かない自動人形を一通り観察すると、警戒のレベルを一段階下げて懸系傀儡を常に動かせる状態で待機させたまま倒れている自動人形の側まで近付く。

「おい、自動人形オートマタ。今のは一体、どういう意味だ？答える。答えなければこの場で破壊するぞ・・・」

「言葉の通りさ、人形破壊者よ。しろうかね 私は、フランシー又様に人間を守るよう造られ、そして命じられたのだ。オートマータ 自動人形が人間を殺し尽くさないように」

自動人形の淡々とした口調に、男は言い様のないものが込み上げてくるのを感じた。だが、それを無理矢理に押さえつけると更に話を続けるように促す。

「なぜだ、人間を殺す自動人形を造った者がなぜ人間を守る命令を下す？」

少しずつではあるが感情の昂りの制御を取り戻した男は、先程よりも更に落ち着いた口調で問いかける。

「フランシー又様の望みは感情と笑顔を得ること。人間はそのために必要な研究材料なのだよ。だが、他の自動人形はフランシー又様を笑わせようとすることに夢中でその事に気付かない。あまつさえ人殺しを楽しむものさえいる。だから、私が造られた。人間が死にすぎないように、そして必要とあらば他の自動人形を壊してもよいと・・・。オートマータ 対自動人形用自動人形それが私。オートマートン 私の全ての戦闘能力は自動人形にのみ向けられる。無論それには人形破壊者や懸糸傀儡もマリオネット 含まれてはいない」

全ての事情を語った自動人形を、まるで信じられないという目で見える男。完全に信じた訳ではなく、半信半疑といった所だ。その男の様子を首だけ動かして自動人形は観察すると、少し考え、無表情に、追い討ちをかけるように続けて一言呟いた。

「先程言っていた君の友・・・私はそれについて少し心当たりがあ

るぞ」

ただ、ぼつりとだけ。だが、男はその言葉に過剰な反応をみせる。先程までの少し惚けたような状態から一転、ハツと目の色が変わり、歯をくいしばって、急かすような、怒るような表情へと変わる。顔は少し紅潮し、息もわずかばかりではあるが荒くなっている。

「君は、なかなかしろうがねに人形破壊者らしくないな。それほど剥き出しの感情、君達においてはなかなかに見られるものではないぞ」

どこか楽しげに、そして濁すように自動人形は感想を述べる。その言葉を受けた男は苦虫を噛み潰したように顔をしかめ、表情を変える。どうやら急所を突かれ腹を立てたようだ。

「さて続きの話は日が昇ってからにしよう。私もいい加減戻らなくては……」

男の様子を見て判断したのか、ここしかないというタイミングで自動人形は話を切り上げる。一瞬、男がまたも驚いた表情を浮かべ、それと同時に手がピクリと動いた。

「このまま逃がすと思っているのか……？」

男は相手につけている隙を与えた事を内心しまったと思ったのか、表情だけに急きよ冷静な仮面をつけると脅すような口調で話す。だが、相手の言動によって百面相のようにコロコロと表情を変える姿は端から見ればなんとも滑稽なものである事を男は気付いていない。本人は至って真面目である。自動人形はそんな男を喜劇でも見るかのような目で見ると、言葉を返す。

「逃がすさ。現在、君の友の情報を持っているのは私だけ。それに、君は私が人間に危害を加えない事を知っている。ならば、今私を壊すメリットは何もないだろう?」

「メリットはないが理由はある。お前は自動人形だ。それ以外の理由はいらん。それにお前が言っていることの保証もない。そして、俺は自動人形を信用せん。ただの命請いであろう?」

間髪を入れずに反論をする男。だが、この時既に自動人形の思惑に乗せられていることには気付いていない。

今、自動人形にとって最も避けたかったのは“有無を言わせぬ破壊”そう、話に応じてしまった時点で男は既に自動人形の掌の上であった。

話を続けている以上男からの攻撃はないと確信している自動人形。これは、戦いの始まりにわざわざ話しかけてきた事からうかがえる。それに保証がないと自ら言うことは、保証さえあれば話を信じるということだ。命請いであると相手に確認することからも男はこちらの話には内心、多分の興味を示していることがわかる。

(あと一押しか。長い間戦いもせず会話ばかりしていたとはいえ、私も随分と小賢しくなったものだ・・・)

自動人形が自らを嘲るといふ事の珍しさに気付くことのない自動人形は、己を笑いつつも目の前の交渉事のさして上手くない男に止めの一言を突き立てた。

「シーターであつたかな、ラーマよ・・・」

一言。そのたった一言が男の急所を貫いた。冷静を装っていた顔が強張る。言葉に詰まり、汗が頬を垂れる。的確な一言。疑う余地の

ない名前を出され、男は戸惑う。

「これで少しは信じたかね？」

最早精神的には完全に優位となった自動人形は、余裕とも言える態度で男に迫る。男の焦点の定まらないぐるぐると混乱する目をまっすぐ見つめ手を出してこない事を理解すると、両手で自らの身体を凄まじい速さでまさぐり始める。

「ふむ、背中部分と服が破損したが動力系の損傷は奇跡的に軽微のようだ。多少痛む上に軋むが・・・まあ、この程度であれば修理可能だな」

そして、服と帯の間に差し込まれていたグリップが木製の工具を両手の全ての指の間に挟み込み抜き放つと、オペを始める医者のように手を掲げ・・・

「“再構築”」

猛烈な勢いで自身の修理を始めた。寝転がったまま的確に自身の破損箇所を分解し、正常な状態へと再構築していく様は奇妙以外の何ものでもない。無表情に虚空を眺めているのに、手だけは異常な速さで動いている。数秒経ち、ある程度前面の修理が終わると、次はうつぶせとなり背面の修理を始める。地面にキスをしたまま肩から指までの関節が人間では有り得ぬ方向に曲がりながら高速で動く様はまさに異様。

前面よりもわずかに時間をかけるも、十秒にも満たない時間でその身体の修復を終えた自動人形は、なにこともなかったように立ち上がると、工具を元の場所へと戻し服についた土をパンパンと払う。

「破れてしまった服は後でマカに縫ってもらおうでしょうか。人形破壊者よ、私は戻るぞ。君の友について聞きたければ、正午私の利用しているゲルへと来るがいい」

そして、それだけ言うくとクルリと踵を返しその場から去って行った。一度も振り向かず、決して襲われることがないとわかりきっているかのように。

うつむき、茫然とする男を残して・・・

第五幕・勝者と交渉・（後書き）

本来、四幕としての二話を二話に“分解”
おかしい点等あればご連絡をお願いします。

第六幕・訪問・（前書き）

少し修正をしました

第六幕・訪問・

「先生、いい加減にして下さい！」

ゲルの天幕の中女性の怒鳴り声が響く。怒声でありながらも透き通ったその声は、聞こえないふりをしようとも嫌でも耳に入り、自分が怒られている事をより一層自覚させられる。

「申し訳ありませんマカ。いつも世話をかけます」

「そう思うのでしたらもつと服を大切にして下さいっ！！」

破れたものの代わりに空色のデールを着た自動人形の言葉足らずの詫びに、より一層怒りを増すマカと呼ばれた女性。10代後半の瑞々しい肌の眉間にしわが浮かび、その切れ長の黒い瞳と細くシャープな眉が吊り上がっている。

「全く、私は先生の奥さんじゃないんですからね……」

ぶつぶつと呟きつつもその小麦色の肌を赤く染め、どこか楽しげに膝の上にあるデールの破れをマカは馴れた手つきで埋めていく。

「とか言いながらマカねーちゃん、ほんとには嬉しいんでしょう？だつてねーちゃんは先生のこと……」

ぶすっ

そんなマカの様子を隣でニヤニヤと意地悪く笑って眺めていたバヤルが余計な一言を言った瞬間、その額に裁縫針が突き刺さった。ち

ぴー、と間抜けな音を出して血が一筋吹き出る。

「バヤル、からかわないのっ!!」

マカはそばかすが見えなくなる程その顔を真っ赤に染め、バヤルの方へと座ったまま振り返る。恥ずかしさか怒りからかぶるぷると小刻みに震えている。そして、お説教が始まった二人の様子を床に腰掛けて自動人形は微笑ましく眺めている。ふと、入り口に気配を感じ、自動人形はガミガミと怒られているバヤルに声をかけた。

「バヤル、どうやらお客さんのようです。出てもらっても宜しいですか？」

それを聞いたバヤルはチャンスだと言わんばかりに意気揚々と立ち上がり、天幕の外まで駆けていく。まだ言い足りないマカが頬を膨らませながら、助け船を出した自動人形を甘いという視線で不満げに睨みつける。

(あとでマカの機嫌もとらないといけませんね・・・)

そんなことを呑気に考えていると、昨夜のしろがねを引き連れてバヤルが戻ってきた。その顔には警戒はなく、知らない人間に対しての好奇心のみが浮かんでいる。むしろ隣にいるマカのほうが怪訝な顔をしてジロジロと男を観察している。顔を隠し、なおかつ大型のトローリーケースを携えた怪しいことこの上ない男のため、マカのこの反応は当然ともいえよう

「すみません、二人共少し席を外してくれませんか？」

自動人形は、二人を見渡すところへ通達。この言葉にバヤルは小さい

声で「ええ〜！」と残念そうに呟き、マカは何も言わずにスツと立ち上がる。余程自動人形のことを信頼しているのである。針を適当な所に差し込み、両手にデールを抱えてそのままゲルから退出しようとする。そして、その様子を見たバヤルも渋々といった表情で反転して先にゲルから出て行った。続いてマカも出て行くが、男の横を通り過ぎる際にキツと力強い瞳で威嚇するように睨みつけてから外へと出て行った。

「さて、これで話ができますね。その前に・・・ターバンとマントは外して下さい。最低限の礼儀ですよ」

二人がこのゲルから完全に離れたことを気配で確認すると、自動人形は男にそう促す。男はしばし考え、それが戦力を削ぐような類のものではないと判断し、無言でターバンとマントを外し始めた。

シルシルと衣擦れの音が静かなゲルの中に響き、男の姿が明らかになっていく。前髪を一本だけ足らし、棘のように逆立った銀色の短髪に褐色の肌。鋭い銀の瞳が自動人形をしっかりと見据え、筋の綺麗に通った鼻と意志が強く顕れているように一の字に口が結ばれている。

マントの下は膝下ほどまで金糸で刺繍が施された黒いシャルワニ（インドの民族衣装。立て襟のロングコートのようなものだが、豪華な刺繍がついており礼装としての意味合いが強い）で覆い、下半身には白いチユリダル（ピッタリとしたインドのズボン。腿から足首にかけて細くなっている。丈が少し長いため、いくつかの環状型の皺が出来るのが特徴）を履いている。ターバンとマントをとった男は、それを脇へ抱えると何か言いたげに自動人形を見下ろす。

「そこへ・・・」

それがわかったのか定かではないが、自動人形は手を自分の正面へ

と差し出し、座るように促した。自動人形が自分の目の前に男がドカツと座るのを確認した直後、軽く会釈をして、その目を見つめる。何かを伺うようなその視線に男の目が不快そうに訴えていたが、自動人形は気にせずとその口火を切った。

「そういえば自己紹介がまだでしたね、私はミスティ・ワイズマン、^{オートマータ}自動人形です。ここでは先生で通っています」

静かに、子どもにでも言い聞かせるような口調で自動人形は男に自身のことを告げる。自動人形のところでは男の顔が一瞬だけ目の色に熱情が浮かぶが、それもまたすぐに元の感情のないものへと戻る。その行動で男が自身の話をすべて聞くつもりであることを確信した自動人形はそのまま言葉を続ける。

「あなたの求めるお話をするには、私自身についても少し語らねばなりません。ですので、少し失礼して私の身上から順にお話していきます」

そして、既に確認ならぬ確認のために自動人形は男の顔を見る。男はコクリとうなずき、話を続けるように無言で促す。自動人形は男の行動を確認すると、口を開き、その身を語り部へと移ろがせていった。

第六幕・訪問・（後書き）

更新が遅くなり申し訳ありませんでした。

第七幕・自動人形・（前書き）

第六幕を少し修正してあります。修正前しか読んでいない方は、お手数ですが前話をもう一度ご覧下さい。

第七幕 - 自動人形 -

私が創られたのはいつだったか……。正確な日時は覚えていません。ただ、目の前にはこの世ものとは思えぬ程美しき方がいたのは今も鮮明に覚えています。

薄暗い、少し汚れた部屋の中で眼前のあの方だけが眩く光り輝いており、私は自分に意識があると自覚した時には、我が瞳に映る御方・フランシー又様を愛しておりました。

その瞳はこの世のどの宝石の輝きにも勝る輝きでした。その髪は銀河に流れる星々の煌めく川よりも美しく流れておりました。

その声はどの音楽よりも私の耳をひきつけ、魅了しました。そして、その天上のお声を以てフランシー又様は意識を持った私に命じました。

「自動人形が人間を殺し過ぎぬよう、監視して下さい。あなたにはそのための力と、私の生命の水の一部を授けました」

この御言葉に、生まれて間も無い私は究極の喜びと至高の悲しみを同時に味わいました。私の身体に流れるフランシー又様の高貴なる生命の水、それに見合わぬ下賤な私。私はフランシー又様の為だけに生きる以外の選択肢を捨てました。フランシー又様が命じたことは我が存在意義と定めました。同時に、フランシー又様に私をお創りさせる程に困らせる下等な自動人形共を憎みました。

私はフランシー又様のご命令通り自動人形達を監視しました。時には彼らの行為を引き止め、時には破壊もしました。それには例外はなく、時には最古の四人と対することもありました。

そのようなことを繰り返す内に、私はいつしか他の自動人形達に忌み嫌われ、遂には狙われる存在となっていたのです。フランシー又

様もご理解していたのでしよう・・・ある日、私を呼び止めるとフランシー又様はおっしゃいました。

「あなたに特別な任を与えます。人間を傷つけず、彼らと生活を共にし、最も近い場所から人間の“感情”を研究するのです。それを終えるまではここへ帰ってきてはいけません」

私はそれがフランシー又様のご慈悲だと理解すると、他の自動人形オートマータ共の嘲笑も無視してその場から去りました。追放者、裏切り者、腰抜け、役立たず・・・様々な罵詈雑言が私の背中にかかる中、私の考えることは弱き人間とどうやって共に過ごすかの、一点だけでした。それから、私は様々に人里を訪れました。ですが、私に待っていたものは拒絶でした。

始めの内は笑顔をもって迎えられるも、何年か経つと、一向に姿の変わらぬ私に対する猜疑、嫌悪、排斥。その度に私は街を変え、国を変え、大陸を変え世界を回りました。

そして、ここへ至る以前の国、中国の山奥で私は彼女と出会いました。

そこは既に戦場と化しており、彼女は自動人形オートマータと戦っていました・・・。

第七幕 - 自動人形 - (後書き)

資格試験のため、更新頻度が落ちます（既に落ちていますが・・・）
。大変申し訳ございませんが、ご了承をお願いします。資格試験が
終わり次第また更新させて頂きます。

第八幕・シーター・（前書き）

皆様大変お待たせ致しました。色々とありましたが、本日より更新を再開致します。

第八幕・シーター・

そこは既に森ではなく、所々木は折れ焼け跡が残り、疑似体液と血に染まっています。自動人形の残骸が地面を覆っており、その数は50を超えていたと思います。

そんな中で彼女とその懸系傀儡は戦っていましたが、私が到着する頃にはその戦いはすでに終焉を向かえていました。彼女の敗北という形で……。

所々破損した黒い懸系傀儡。首から上はなく、右腕は根元から折れており、両膝から下がなくなった懸系傀儡は地面になんとか立っているものの、その姿は許しを請う人間が相手を見上げているように人形破壊者にとっては屈辱的な光景であったと思います。私が目撃したのは、そんな状態の懸系傀儡の胸を後ろにいたしろがねこと自動人形の拳が貫いた瞬間でした。

私は一瞬で状況を判断すると、これ以上の追撃を止めるべくある機能を使い自動人形に命令しました。

「自動人形よ、フランシーヌが命じます。退きなさい！」

それは、天上の楽器のように音色豊かなフランシーヌ様の御声。私には録音されたフランシーヌ様の御声を自由に扱うことができたのです。この声によって本能に訴えられた目の前の自動人形、ボンバーヘッドは彼女の胸に突き立てた拳を反射的に抜き、後ろへと飛び去ると私の存在に気付いて忌々しそうに私を見やりました。

「貴様、ミスティ……!？」

爆発したかのように盛り上がった黒の頭に、人間と同じ四肢。黄色い空手着に黒帯というどこか歪な服装に2mを超える体格のその自

動人形は命令されたことに従ってこの場から離れ森の中へ消えていくも、その顔はいつまでも私を向いており、憎悪の籠った目でこちらをずっと睨みつけていました。

「ニンゲンよ、大丈夫か？」

私がそう尋ねると、その女性は自嘲気味な笑いを浮かべて私に言いました。

「まさか自動人形オートマトに助けられちゃうなんてね・・・」

「私はニンゲンが狩り尽くされないように造られた自動人形オートマト。先程の行動は妥当なものだ」

私の目的、そして行動理念を伝えると彼女その少女のような大きく丸い瞳を広げ、少し眉尻の下がった眉をあわせて上に持ち上げて驚くような表情をした後・・・

「ふふ、最期に変な自動人形オートマトに会っちゃったな・・・。私はシート、助けてくれてありがとうがとね、変な自動人形オートマトさん。ついでに私の最後のお願ひ、聞いてくれる？」

私に向かって笑いかけました。その瞬間、私の中に得体の知れぬものが生まれ、それが全身に広がる感覚を私は覚えました。それは決して嫌なものではなくむしろどこか心地のよいもので、熱を持たぬこの機械の体が少し温かくなったような気がしました。

「・・・できる範囲であれば」

私がなぜそのような返答をしたのかはわかりませんが、彼女・・・

シーターはそれを聞くと満足したように頷いて、

「私の遺言をある人に伝えてほしいの」

そう私に言いました。

第八幕・シーター - (後書き)

シーターやボンバーヘッドの描写が少ないですが、後々補完する予定です。そして今更ながらに切らずにここまで読んで頂いた方々、ありがとうございます。

第九幕・遺言・

「ここまでが私が体験したお話です」

ゲルの中、床に座り対面する自動人形オートマータと人形破壊者しろうがね。決して相容れぬ二者はしばし無言で向き合っている。しばらくの静寂な間の後、ラーマが意を決したようにミスティに尋ねた。

「遺言の・・・内容を」

それは、ラーマにとって聞きたくなかったものなのかもしれない。頭では理解していた最愛の人間の死をこれからその心に刻みこまなければいけないからだ。先ほどの間は覚悟に用いた時間であったのだろう、ラーマのその瞳には余分な濁りはない。完全に真実と向き合い、話を真摯に受け止める以外の感情は排除していた。

「では・・・ここからは“私の言葉”ではありません。一度しか言えませんが、よく聞いてください」

ミスティはそうラーマに告げると、ラーマは頷き続きを促した。その行動を見たミスティは意識を切り替えて自身の持つ能力を開放する。

それは、録音したものの再生。今の技術でこそそれは簡単にできるが、100以上前に作られたものがその技術を扱う。当然現在と同じようにはいかない。回数の制限があるために、わざわざラーマに一度と告げたのだ。ただ、ラーマ自身も何度も聞くつもりがないことはその表情から容易に見てとれた。

その顔に納得したミスティの目の焦点が変わり、目の前のラーマで

もないどこかを見つめはじめ。そしてその口を再び開くのだが、そこから漏れた声は先ほどまでの落ち着いた男性の声ではなく、母のようなどこか安心する優しい響きを持った、女性の声であった。

「『ラーマ、この自動人形オートマータを通じてあなたに私の最期の言葉を伝えます。』」

その声を聞いた瞬間、まるで走馬灯のようにラーマの中で最愛の恋人、シーターの姿が流れた。

女性の中では背の高いその身体。

背に少しかかる程の艶やかな髪。

少女のような丸い瞳に少し眉尻の下がった眉。

少し低めだが綺麗に筋が通った鼻に薄い唇。

そして、ラーマと同じ肌色。

初めて会った出会い、共に組んで戦った日々。将来を話し合った夜。任務で別々の場所へと赴いた別れ。一瞬の内に次々と頭をよぎる思い出の数々。厳しくも幸せだった過去に、ラーマは涙が溢れそうになるのを押さえるが、録音された遺言はそんなことに構う暇なく再生され続ける。

「『覚えてる？初めて出会った時、私達は同じ国の出身だったことだけでコンビを組まれたのよね。もっとも貴方は不器用な上に口下手で、貴方の事を理解するにとても時間がかかったわ。貴方はその時から私をしるがねらしくないと言っていたけど、私は貴方こそしるがねらしくないと思っていたわ。すぐ怒って、すぐ拗ねるしその上・・・他のどんなしるがねよりも優しいんだもん。貴方はいつも私を守るように動いてて、そんな貴方に惹かれていったわ。貴方が顔を真っ赤にして初めて私をデートに誘った時、凄く嬉しかった。』」

私は自分がしろがねである事も忘れて大喜びしたわ。不思議ね、辛いこともいつぱいあったのに、貴方との楽しかったことしか思い出せないの……。ねえ、ラーマ。戦いが終わったら一緒になろうねって約束、果たせなくてごめんね。でもね、あの時貰った指輪、ずっと着けてるの……。左手の、薬指に……。ね。ホントは貴方の顔を見てもっともつと話したかったけど、どうやら……。時間みた、い。私、あなたと、会、えて、幸せ、だった……。わ。ラー、マ……。あ……。い……。し……。て……。る……。『』

そこで、録音された音声の再生が終わりを告げる。ミスティは目の焦点を戻すとラーマを見た。

ラーマは無言で俯いており、その手が強く握りしめられていた。強く握り過ぎたせいで血が滲んでいる。そして、俯いていたラーマの顔からはポツポツと落ちた雫が床を濡らしていた。

第九幕・遺言・（後書き）

ラーマとシーター、『うしおととら』とは関係ありません。ラーマ
ーヤナの登場人物から名前を頂きました。

第十幕・爆弾頭・（前書き）

次の展開への導入部分です。グロ？注意です。

第十幕・爆弾頭・

ラーマ達がいる集落より少し離れた場所、荒野にはそぐわぬ一台の車が停まっていた。

冴え渡るピンクの鋭角的な風を切り裂くようなボディのオープンカー。その後部座席にドカッと180°近く大腿を開き、車内に収まりきらない足をエンジンの駆動で振動するドアの上にかけて外へと出している。

顔から下を胸の真ん中に黒字でBとかかれた黄色い全身タイツで覆い、靴底部分と靴紐が白い、赤のナイキのスニーカーを履いている。黒人ばりの肌に、割れたアゴ、彫りの深い顔の半分程あるモミアゲに黒いアフロ。以前と姿が少し変わっているが、自動人形オートマタボンバーヘッドである。

「キャ~~~~~ットマン、どうやらあそこがクソ忌々しいミスティの隠れ家のようなな？や~~~~~と見つけたぜい」

やけに太い男らしい声で独特の話し方をするボンバーヘッドは、運転席に座るキャットマンと呼ばれた自動人形オートマタに話し掛ける。

キャットマンと呼ばれた自動人形オートマタは、振り向くとニヤリと笑って白い手袋に包まれた親指を立てて答える。

「この程度のことでもできないと君の相棒は名乗れないからね」

ボンバーヘッドとは違い比較的若々しく凛々しい青年のようなその声の主。彼の姿は、なんとというか・・・お遊びが過ぎる容姿だった。バーコードハゲの日本人のオッサンに黒のネコミミを着けたと言え

ばわかるだろうか、クリクリとした猫と同じ瞳がキャットの部分を強調しているかのような輝く。

黒のタキシードに白いシャツ赤い蝶ネクタイを着ているものの、全体的にミスマツチである。

だが相棒であるボンバーヘッドは勿論、キャットマン自身も別に気にしていない。それは自動人形オートマータであるためだが、もしここに人間がいたら百人が百人とも理由はわからないが、ふざけるな！と叫びたくなるだろう。

「さ~~~~~~~~って、一暴れするでしょうかあ！野郎共、準備はいいか！」

ボンバーヘッドがそう言った瞬間、地面から大量の自動人形オートマータが土を破って飛び出た。皆タキシードか黄色い全身タイツを着ており、この二体の配下だというのは誰の目から見ても明白である。

「おー、怖い怖い。そのミスティとかいう自動人形オートマータには同情するよ」

そう呟くキャットマンの顔は楽しげに歪んでおり、これから起こることを予期していた。そして、災厄を連れた車はゆっくりと走り出した。

第十幕・爆弾頭・（後書き）

お遊びが過ぎるのが作者なのは確定的に明らか。前書きのグロは・
・あいつの事です。なんか、色々とやりすぎました、すいません。

最後に一言、ボンバーヘッド×キャットマ（死

第十一幕・奇怪、そして・・・（前書き）

大変お待たせいたしました。

第十一幕・奇怪、そして……

場面は再び自動人形オートマタと人形破壊者の元へと戻る。

全ての伝言を伝え終ったミスティは、どこか重い空気の中で自分の懐からある物を取り出した。

それは、金でできた小さい指輪であった。宝石はついていないものの緻密な彫刻が彫り込まれており、決して安い物ではないとわかる。そして、それと同じ物がラーマの左手の薬指にはめ込まれていた。

「これを……」

ミスティはラーマの右手をとると、それを握りこませる。その冷たく硬い感触にラーマはシーターがいなくなったことを実感した。

そのまましばしラーマは目を瞑り、回想とも黙禱ともとれる状態ではしばらく時間を過ごす。

そして、決意するように眼まなこを開くと目を開きミスティに向き直る。

「二つ……聞きたいことがある。シーターの懸系傀儡マリオネットの行方と俺がラーマとわかった理由だ」

その質問にミスティは立ち上がり、部屋の隅まで歩くとラーマのものとの作りがよく似たトローリーケースを手にとる。色が赤黒く変色しきっており、それは所々傷や穴が空いてボロボロだができる限りの補修がされていた。

「最早これでおわかりいただけだと思いますが、彼女の懸系傀儡マリオネットは許可を得て、私が回収し修理をしていました。そして、あなたがラーマとわかったのは、彼女に教えていただいたからです。『私の死んだ後、最初にあなたの元へ来るしろがね……それがラーマよ』」

と」

ラーマはその言葉を聞きながらも、目はその手に持った物に釘付けであった。

それを見たミスティはそのままケースをラーマの目の前に置き、再び先と同じ場所へ座る。

ラーマはケースにおそるおそる手を伸ばし、指先、そして手のひらへと触れていく。

「……………ありがとう」

ぼそりと消え入りそうな声でラーマは呟く。一瞬、口元がほころんだようにミスティが感じると、彼が纏う空気がどんどん柔らかいものへと変わっていった。おそらくこれが彼本来の持つ空気なのだろう。その事に微かな満足感を覚えると、ミスティは自分の表情が変わっていることに気付いた。その表情は自身ではわからないものの、悪いものではないとミスティは思っていた。

……………ぜひつ。

声が、聞こえた。それはとても小さく、普通の人間には聞き取れないであろう声だった。だが、その声が聞こえた瞬間、ミスティはとてつもなく不快な感じがして咄嗟に立ち上がる。理屈で動く人形の体が勝手に動くなどありえないと自分でも理解しながらも抑え切れない“何か”に誘われるようにして、ミスティは怪訝そうな顔をするラーマの横を通りすぎて外へと向かう。

そうして外へと向かう数歩の間、ミスティは一步を踏みしめるたびに高速で思考をしていた。

“何かがおかしい” “静かすぎる” “なぜ?” “今の声は?”

そして、その結論が出ないままに天幕を開いたミスティは、

思考が停止した。

第十一幕・奇怪、そして・・・（後書き）

7月11日現在、続きを鋭意執筆中です。頑張ります！

第十二幕・地獄・（前書き）

祝、2000PV突破。読者の皆様方ありがとうございます。
こんな小さなことでも幸せだと感じる男です。

第十二幕・地獄・

『地獄絵図』まさにその言葉こそがふさわかった。昨日までの楽しげな笑い声はなく、乾いた咳のような音だけが断続的にその場の空気に溶けていた。

……ぜひっ

集落で一番器量のよかったトヤー！

……ぜひっ

いつも兄弟仲がよかったエネビシ、テレビシ。

……ぜひっ

6人目の子を授かったと笑っていたナツアグ。

他にも見慣れた顔の者達が死々累々と地面に倒れ、動く力も助けを求め、力もなくひたすらに生きている。ミスティはそのあまりにも無慈悲な光景を目の当たりにして、何もできずにただ衝撃を受け止めることしかできないでいた。その様子を後ろから不可解に見てい

たラーマは、急遽立ち上がり硬直しているミスティを横に押し退けて外の様子を伺う。

「!?!」

外に倒れている者だけでも10人以上いるゾナ八病患者、それも段階で言えば最悪の三にあたる。ラーマ自身もゾナ八病にかかったことのあるためその苦しみは“身をもって”知っているのだが、それでも二段階目までであり、残りは知識だけである。ここまで酷くなる病だったのかと内心舌打ちをし、それと同時にこれを引き起こした者を探し始める。

自身の経験からこれは自然に起こるものではないと確信があるためである。すると、今まで黙り込んでいたミスティが口を開いた。

「・・・倒れている者達をゲルへ」

相変わらずに無表情ながらもその絞り出すような声にラーマはミスティの“感情”が伝わったような気がした。二人で手分けをしてそれぞれ付近のゲルへと運ぶと、併せてゲルの中にいる人間も確認する。数分程でなんとか全ての人間をゲルの中へと収納し、二人はそのまま外で話し合う。

「俺が確認できたのは12人。無事な者は一人も・・・」

ミスティは自分が確認した人数とラーマが確認した人数を足すが、そこにあつた差異に気付き戦慄を覚える。

「二人・・・足りない」

そして、その二人という人数にラーマは心当たりがあった。それは、

唯一対面したあの二人の顔である。

「おい、俺がここに来た時にいた二人は確認できたか？」

その問いにミスティはいない人間が誰なのか確信する。それと同時に言い様のない喪失感と体の歯車が熱をもつて高速で回転しだしたのを感じる。それは、紛れもない怒りという感情であった。

ラーマもその様子からミスティも二人を確認できていないと判断する。

そして、ラーマが二人を探しに行くべきと提案しようとした時である、聞き覚えのない野太い声が大音量で集落に響きわたった。

《《ミ~~~~ステイ！聞こえるか！貴様の守るべき人間は預かった！返してほしくば俺が送ったゴ~~~~ジャスな迎えに乗って俺の元まで来い！》》

その直後、二人の耳にエンジンを吹かす音が聞こえ、そちらを見やるとこの場には全く似合わないキツイピンク色のオープンカーが停まっていた。

中からは運転手らしき自動人形オートマータが手招きしている。

「ラーマ、私に作戦があります。聞いてくれますか？」

その車に体を向けたまま、ミスティは口を開かず小さい声でそう切り出した。

第十二幕・地獄・（後書き）

沢山の方々に読んで頂き嬉しいのですが、作者と致しましては是非とも一言でいいので感想を頂きたいです。

でも私は知っています、自分を信じて努力し続ければ夢はいつかきつと叶う事を。

そう言ってたのは最悪の奴なんですけどね。

第十三幕・策・（前書き）

更新が遅くなりました。

忙しすぎて小説どころかプライベートすらほとんどありませんでしたよ……

第十三幕 - 策 -

どこまでも続くかのように景色の変わらぬ大平原を光り輝くピンクのオープンカーが風を切り裂いて走る。

その中にはミスティとキャットマンという2体の自動人形オートマタが黒いシートに座っており、そのうちのキャットマンは鼻歌交じりに車を運転している。

一方の助手席に乗ったミスティは無表情にひたすら行き先を眺めているが、無表情よりかは感情を押し殺しているといったほうが正しいだろう。

ミスティは今からでも暴れだしたい衝動を抑え、ラーマに伝えた作戦を自ら反芻する。

『作戦と言うには穴がありすぎるものですが・・・私が先に行つてある方法で奴等の動きを止めます。その間は私も動けなくなりますので、あなたはここの安全を確認した後、バヤルとマカを救出しに来て下さい』

思い出し、本当に穴だらけの作戦だとミスティは思った。だが、絶対に自動人形オートマタを止められるという確信があるからこそその作戦でもある。

自動人形オートマタの本能に訴えかけるフランシーヌの言葉、それは使うミスティ自身も例外ではない。

もし『動くな』と命じればミスティ自身も動けなくなるのだ。そう、この作戦の最も大きな穴はラーマが来ない、もしくは裏切ることであった。

彼の性格からして絶対に二人は助けるであろう。しかし、その後どうするかは彼次第だ。だが、ミスティは覚悟をしていた。それは、もし彼が裏切り自分が壊されようとも決して言葉を覆さない覚悟であった。

「着いたニヤ」

キャットマンがそうかけた声により思っていたより長く考えに耽っていたことをミスティは自覚し、言われるがままに車の助手席を降りる。

車から降りながらも、ミスティはある一点を注視していた。

「ウエ~~~~~~~~ルカ~~~~~~~~ム」

視線の先にいる男から聞き覚えのある野太い声がミスティの耳に入った。声の主は勿論、ボンバーヘッドである。似たような姿の自動人形が組体操の4段ピラミッドを作り、その上に足を組んで座っている。

「バヤルとマカはどこですか？」

無表情に、だが明らかに“感情”がこもった声でミスティは呟く。それを愉快そうにボンバーヘッドはニヤニヤと眺めて、指をパチンとならす。

すると、ピラミッドの後ろから首輪に繋がれた二人が現われた。

キャットマンと同じタキシード姿の自動人形オートマータが二人の首輪から伸びた紐の先を持っており、さながら飼い犬のようだ。

二人はミスティを見ると、今までの沈痛な面持ちからうって変わってその名を呼ぶ。

「先生！」

助けを求めるその声にミスティは安心するように“作った”笑顔で応え、ボンバーヘッドを睨み付ける。

「二人を返していただきます」

そう冷たく言い放つミスティに対し、さも愉快そうに笑いボンバーヘッドは挑発をする。

「い〜〜〜〜やだと言ったら？」

「力づくで取り返します」

そう言った瞬間ミスティの姿がその場から消える。虚を突かれ、ボンバーヘッド達は反応が遅れる。

「お？」

直後、間抜けな声と共にバヤルとマカの手綱を持っていた自動人形オートマタの首が跳んだ。

残った胴体の横にミスティは静かに佇んでいる。

「二人共、無事ですか？」

振り返り、優しく尋ねるミスティに二人は驚いた顔で首をぶんぶんと縦に振る。

ミスティはじつと手綱を見つめると、目にも見えない速さで手刀を振り下ろし、それを断ち切った。

「私はあなた達とは造りが根本的に違うため、人間の前でも知覚できない速さで動けます。明確な差が理解していただけたのなら、これ以上の争いは無駄だと思いますが・・・続けますか？」

これはミスティの挑発であった。いくらこの場の自動人形オートマタの中でも速く動けるとは言え、全員がバヤルとマ力を狙って動かれたら守りきれぬ自信はミスティにもなかった。そのため、挑発をすることで標的の注意を自分へと向かうように仕向ける。さらに、この挑発は炙り出しも兼ねていた。

フランシーヌの言葉は自動人形オートマタが相手ならば絶大な力を発揮するのだが、効果範囲がそれ程広くないため、もしその範囲の外に伏兵が置かれていた場合、致命的となる。加えて、ミスティ自身にも効果が及ぶため二人を守れなくなってしまう。この挑発にはボンバーヘッドを激昂させ、彼に隠れている者達をけしかけさせる狙いもあった。

「・・・言っじゃないか」

少し声色の変わったボンバーヘッドの声を聞き、ミスティは上手くいったと確信する。

「バレバレの挑発ニヤ。乗ったらダメニヤ」

だが、車から降りながらキャットマンがそう言ったことで、その狙いは無となってしまう。急速に冷静になるボンバーヘッドにミスティは内心で微かな苛立ちを覚えたが、その表情には出さない。

冷静さを取り戻したボンバーヘッドはそれを察したのか、一転して

心底楽しそうに表情を歪めた。

「偉そうに語るねえ。知ってるぜ、貴様の体に流れているその大層ご自慢の生命の水アクアウイタエ、起動できるギリギリまで薄められているんだろ？ほとんどただの水と同じじゃねえか」

卑しく口角をあげて笑いながら綴るボンバーヘッドのこの言葉をきっかけに、その部下達が一斉に笑い始める。

所々でミスティを貶める言葉が飛び交い、嘲笑の音が響く中、ミスティはギリリと奥歯を噛み締める。

「まあ、そんな可哀相なミスティさんのためにそのバレバレの挑発に乗ってやるうかね」

ミスティはそれを聞き、ボンバーヘッドの精神的余裕からくる驕りであろうと判断した。さらに、これが唯一の好機だとも判断する。

「野郎共！カモ~~~~~ン！」

ボンバーヘッドの掛け声の直後、地面がボコボコと膨らんで弾けた。そして、その穴から十数体の自動人形オートマタが飛び出した。皆、ボンバーヘッドやキャットマンと同じ姿だ。

「さ~~~~~って、全員でミスティを八つ裂きにしまいな」

この命令にボンバーヘッドの椅子代わりを除いた数十の部下達が一斉にミスティに襲いかかった。

そして、ミスティはここしかないというタイミングで言葉を紡ぐ。

「『フランシーヌの名において命じます。停止とまりなさい』

直後、世界が凍り付いたようにこの場の全ての自動人形オートマータが動きを止めた。

第十三幕・策・（後書き）

く巻末おまけ的なアレ」

ミ「実は私、フランシーヌ様以外の声真似も得意なんですよ」

ラ（いきなりなんだ？つーか声真似だったのかよ・・・）

ミ「まずはパンタローネから・・・」我が衣装はフランシーヌ様に
いただいたものである。・・・どや？」

ラ「少し違う気もするが、確かに似ているな」

ミ「次はコロンビーヌ・・・」あゝ、あたしもこんな恋愛してみた
いわア。スイーツ（笑）」

ラ「もはや真似る気ないだろ」

ミ「更にアルレッキーノ・・・」うん、たん うん、たん うん、
うん、たん 』」

ラ「・・・」

ミ「最後にドットレですが、これは迫力、演技力ともかなり自
信があるんですよ」

ラ「へへ、そうなのか。やってみ」

ミ「コホンッ、では失礼して・・・」

『フランシーヌなど、^{オレ}己になんの関係もない!』」

ちゅどーん!

ラ「あ、壊れた」

第十四幕・絶望・（前書き）

誤字脱字、描写を修正しました。

内容的には8月26日の17時に投稿されたものと変わりありません。

第十四幕 - 絶望 -

「せ……んせい？」

自動人形オートマトの時間が止まった空間、戸惑いに満ちたバヤルの声が響く。

声をかけられたミスティは動くことなく、それこそまるで“時間が止まった”ように光を失った目で虚空を見つめたまま立ち尽くしている。

「バヤル……」

本来ならばマカも落ち込みたかった。「先生！」と叫びたかった。だが、目に見えて落ち込んでいるバヤルを見てしまったため姉として気丈に、そして優しく弟に接することを選び、貫いた。

「行きましょう。先生は私達を助けるためにこうなったのだから」

眼下に涙を溜めたバヤルの肩にそっと手を乗せたマカはそう言い聞かせた。バヤルもマカの手から伝わる何かに気付いたようで、若い少年の心ながらそれを受け入れ、頷いた。

そして、二人が背中を向けてその場から去ろうとした瞬間とぎ、吹き飛ばされた。

「か……はっ」

突然の背後からの衝撃で二人の肺の中の空気が押し出され、苦痛の聲が漏れる。そのまま地面に俯せに叩き付けられたが、幸いにも衝撃はそれほどではなかったため、骨折などの大きな怪我はなかった。

しかし、突然の出来事と痛み二人は困惑する。

そんな時である、自分達を家畜のように扱った憎き相手の声が響いたのは。

「サ~~~~~プラ~~~~イズ。どうだい？二人共、束の間の静寂は楽しんで頂けたかい？」

二人が振り返ると、先程まで動きを止めていたはずのボンバーヘッドが何事もなく両手を広げて座っているではないか。

そして、どうだと言わんばかりの顔で二人を見下ろしている。

「このオンボロに意識があれば、面白い光景が見れただろうに・・・残念ニヤ」

二人のすぐそばでキャットマンが動かぬミスティを眺めながら寒気がするようないやらしい笑みと共にそう零す。

位置的に見て、二人を突き飛ばしたのは彼のようだ。

「だ~~~~~いたい、フランシーヌ製の人形なんて今更古いんだよ。やっぱり時代は造物主様だぜ。なんたってもうあんなアバズレに従わなくてもいいんだからな！」

その台詞をきっかけに火がついたように、わつと笑い始める人形達。その笑い方は皆同じで、二人は言い様のない嫌悪感に襲われた。

「全く・・・大事な大事な人質がピンチだつてのに呑気なものだ、ニヤ！」

そして、キャットマンはそう語りながら立ち尽くすミスティの目の

前に歩いて移動し、その顔面を力の限り殴る。

ミスティはドンツという音と共に支えのない棒の如く地面に倒れた。

「抵抗のできない虫ケラをいたぶるのは全くもって愉快ニヤ！それ！それ！」

そして、嬉しそうな掛け声をあげて、倒れたミスティの顔面を革靴で何度も何度も踏みにじる。踏み付ける度に土埃があがり、ミスティの体はどんどん薄汚れていく。

「やめろー！ー！ー！ー！！！」

その有様を半身だけを振り返って眺めていたバヤルが止める間もなく怒りの叫び声をあげてキャットマンに全力で飛び掛かった。

もう一度踏もうと片足を上げた所に、脇腹への思わぬ衝撃でキャットマンはバランスを崩し、慣性と共にバヤルと地面を何度か転がる。

「バヤル！」

バヤルの突然の行動にマカが思わずその名を叫ぶが、弟の耳には届かない。

何度かの回転の後、地面に仰向けに横たわったキャットマンを尻目に土まみれになったバヤルが急いで立ち上がり、ミスティの様子を確認しようとその元へ駆ける。が、突然右足が重くなった感覚がして振り返った。

「この餓鬼・・・やってくれたニヤ」

そこには怒りの形相で右足を掴むキャットマンがいた。吊り上がっ

た目は瞳孔が縦に開き、食いしばる口には牙が光る。
バヤルの右足を握ったまま、土まみれのキャットマンは上半身を起
こして立ち上がる。

「あ~~~~あ。あの餓鬼、やっちまったなあ。綺麗好きのキャ
ットマンをあそこまで汚したんだ。死ぬかもなあ」

そんな激昂したキャットマンをなだめることもなく、ボンバーヘッ
ドは見世物でも始まるかのようにそう語る。

その声はキャットマンの怒りというシヨールが見れて嬉しいと言っ
ているようだ。

そのボンバーヘッドの発言を聞いてしまったマカは、バヤルを守る
べく背中 of 痛みを堪えて立ち上がり、キャットマンへと駆け出した。

「お前のせいで土まみれだニヤ。流石にイラッときたニヤ」

右手で軽々と逆さに掴みあげられたバヤル。離せと喚き、両手をジ
タバタと動かして暴れるもキャットマンは意に介さず、怒りのまま
振りかぶって肩越しにぶん投げた。一瞬であるが遠心力により体に
急激なGがかかり、バヤルはぐりんと白目を向いて意識を失う。

静かになったバヤルは意識がないまま、高速で宙へと投げ出された。

「バヤル！」

バヤルが投げ出されたその瞬間、マカには全てがスローモーション
に見えた。

弧を描いて宙を舞う弟。笑う人形達。動かないミスティ。必死に走るも間に合わない自分。

どうして？

どうして？

どうして？

なぜ私達がこのような目に会わねばならぬのか、マカはいつの間にか足を止めていた。既にバヤルの命を諦めていた。せめて、意識がないのが救いだとすら思っていた。そんな絶望の中、それを引き裂く男の力強い声が響いた。

「スプリングルド！アアクションツツツ！！」

第十四幕・絶望・（後書き）

ラーマ（さんかっけー）

バイトの合間にコツコツ執筆していましたが、やっと書けました。

次回から本格的バトルに入ります。入りたいです。なので、しっかりと
りかつちり本気で描写をしなければ！

・・・別に普段、手を抜いている訳ではないんですけどね。

第十五幕 - 開戦 -

黒い影が地面を滑るように“跳ん”でいた。

両のバネ足を限界まで収縮させた反動は、踏み締めた地面を爆発させ、傀儡はマカの横を通り地面に叩きつけられようとしているバヤルに向けて弾丸の如き速さで迫る。

マカは背後から強烈な風が過ぎるのを感じたが、それが人形であると判断したのは伸びたバネ足が、元の状態へと戻ろうと傀儡の後を帯を引くように追いかけていたのをかるうじて目で追えたからであった。

だが、足りない。

それでも距離が、速さが、長さが足りなかった。

“ぶつかる”マカがそう思った時にはラーマは既に両腕を動かし、傀儡に命じていた。糸から伝わった動きが傀儡へと伝わり、主の望むままに傀儡は動く。

与えられた命を遂行すべく、傀儡は手の平を上に向けて蛇腹の両腕を高速で伸ばしバヤルの着地点へと滑り込ませた。

「っ！！」

ラーマの機転によりバヤルはギリギリのタイミングで硬い地面に叩き付けられる事だけは避けられた。だが実際にはただそれが人形の腕に変わっただけ。容易に想像できる結末にマカは目を逸した。

しかし・・・

ボスンッ！

と、聞こえた軽い音に思わず逸していた目を戻した。

「え・・・？」

そこにはバヤルを抱きかかえたスプリングルドが立っていた。見る限り双方には激突による傷はなく、スプリングルドは何事もなかったかのように平然とマカの元へ向かって歩いてくる。まさかの光景にその場の誰もが動けなかった。

「伸びきった所を斬られぬよう、スプリングルドの腕の外層部にはしろがねの最先端技術で造られた衝撃吸収材が使用されている。今回はそれに助けられた」

ラーマはマカの疑問に答えるようにそう語ると、腕を下げて指先だけで人形を操作しながら、マカの横を通り倒れたままのミスティへと向かって歩く。

途中、バヤルを運ぶスプリングルドとすれ違ってもそちらをちらりとも見ないでミスティの元へと辿り着いた。

「おい、いつまで寝てるつもりだ。あいつらを死なせたくなかったらさっさと起きろ。それまでは俺がなんとかしてやる」

何も反応がないミスティに対してぶっきらぼうにそうラーマは言い

放つと、ギリギリと歯ぎしりをたててこちらを見ているキヤットマンに目を移す。

「お前のせいで殺せなくて余計にフラストレーションが溜まったニヤ。本気でぶつ殺すニヤ。見るがいい、この変身を！」

そうラーマに向けて叫ぶと、キヤットマンは四つん這いになる。バリバリと服が破れる音がして、その体が黒の体毛に覆われて猫のそれと同じようになっていく。

全身の変身が終わった姿は人面猫で、ほとんど変わっていない首から上であるが、唯一の変化として猫と同じ髭が鼻の横からピンと生えている。

だが、その大仰な変身をラーマは完全に無視していた。キヤットマンに背中を向けてスプリングルドを操作し、バヤルをマカに預けている。

「こつちを見てないとは、いい度胸ニヤ・・・」

プルプルと震えたキヤットマンの怒りは完全に頂点に達していた。無音で地面を蹴り、無防備なラーマの背中を思い切り噛み立てようとする。ぐしゃりと嫌な音がした。

「な・・・んで・・・ニヤ」

それは飛び掛かったキヤットマンの顔面に鉄の靴底が突き刺さった音であった。

ラーマの顔の横を的確に通り抜けて、キヤットマンの顔をトマトの

ように潰し、歪ませている。そのままズルリとキャットマンは重力に引かれて地面に落ちた。

目の前で急に高速で振り返って蹴りだしたスプリングルドに、バヤルを受け取って抱えているマカは啞然としていた。

「あきやきやきやきや！」

そんなマカを横目で見たスプリングルドはまるで意思があるかのようないやみで笑い声をあげ、一足跳びでラーマの隣へと移動する。

「さっさとそいつを抱えて行け。こいつらの相手は俺がする。」

呆然と立っているマカへ、首だけを回してラーマはそう話しかける。ハッと我を取り戻したマカは焦ったように顔を赤く染めてぶんぶんと首を縦に振った。

「もののついでだ、お前らの先生とやらも守っておいてやる。さあ、行け」

全ての心配がなくなったマカは、ためらうことなくバヤルを抱えて走りだし、その場から離れていった。

「わざわざ律義に待っていたみたいだが、何か策でもあるのか？」

「ナ~~~~~~~~ッシング。ただ貴様の茶番に付き合ってただけさ。久々に歯ごたえのありそうな獲物を不意打ちで殺しても、俺は相棒と違って面白くなれないからな」

問い掛けたラーマに、まさに自信満々といった様子で答えるボンバーヘッド。

一人と一体の視線がぶつかり、張り詰めた戦場の空気へと変わっていき、それと共に音が消えていく。

そして、静寂を破るように両者は叫んだ。

「野郎共、殺せえ！」

「スプリングルド、シヨオウタイム！！」

第十五幕 - 開戦 - (後書き)

本来ならばまだ続くのですが、更新がかなり遅れそうだったため無理矢理分割して先にあげました。

申し訳ありません。続きは急いで執筆致しますので……。

第十六幕・黒き森・（前書き）

毎度毎度遅い更新に読者離れが気になる藤田でございます。

第十六幕・黒き森・

ボンバーヘッドの掛け声と共に一団となってラーマに襲いくる十数体の自動人形。オートマタ

それらは全て黄色い全身タイツを着たボンバーヘッドの部下であり、キャットマンの部下は傍観している。

対するスプリングルドは動かず、両手を前方に向けて真直ぐに伸ばし、その鋼鉄の爪の先を一団の方向へと向ける。

そして、ラーマはスプリングルドの腕の延長線上に人形達がいるのを確認すると、手の甲を相手に向けて腕を胸の前で交差し、開き、反転させながら下に降ろした。

「スプリングルド、炎の雨《フリー・アンフラメ》！」

その動作に対応してスプリングルドの腕より大きい手首カフス（Yシャツなどの手首部分、少し硬い布で作られている）部分が、カシヤリと音をたてて手の甲側と手の平側が半円状に分かれて広がる。その中からは多数の黒い銃口が数珠状に見えている。

「射撃は苦手なんだがな。的が多くて助かる」

「!?!」

その鈍く黒光りする銃口を確認したボンバーヘッドの部下の一団は、躲すべく足を止めて急停止を試みる。

転ばぬよう腰を落とし重心を後ろに向けるも、殺しきれない慣性で地面を削りながら失速していく。

だが、彼らは待つてくれない。

恐怖に顔を歪めても、早く止まろうともがいても、そして背を向け
て逃げようとも。

「フウ・ライ
発射」

声と同時に銃口が火を吹き、感情のない鉄の飛礫ヒズルが無慈悲に容赦な
く人形達に襲いかかる。

連続した炸裂音が轟き、螺旋に回転した銃弾が人形の体を穿つ。

全て撃ち尽くし、僅かな静けさと共に硝煙が晴れる頃には、風穴か
ら噴水の如く疑似体液を吹き出して倒れる人形達がいた。

「シ〜〜〜ッ、油断しすぎだバカチン共が」

部下がやられたというのに怒る様子もなく、その非を責めるだけの
ボンバーヘッド。

冷たい視線を向けられるも、声をかけられた人形達は伏したまま何
の反応も返さない。

全弾を放出したスプリングルドのカフスが自動的に閉じ、ラーマは
肩口にかけて真っ直ぐ正面に伸ばされたスプリングルドの腕を下ろ
す。

「いつまでもそんな所に座っていないでいい加減かかってきたらど
うだ？」

そして、うんざりだと言いたげにボンバーヘッドを睨みつけるが、聞かれたボンバーヘッドは口の端を上げるだけだ。

ただ、その目には怪しい光が灯っている。

「お前は俺達を舐め過ぎだぜ？」

その言葉をラーマが聞いた瞬間、ボゴツと音を立ててラーマの足元の地面から自動人形オートマータの腕が四本現われた。

その腕はラーマの足首を掴むと両足を地面に引きずり込む。

「ぐっ」

突然の奇襲に、ラーマはスプリングルドを操り対応しようとするが

・

「!?!」

突如飛来した大量の黒い針がそれを遮った。

咄嗟に行動を変えてスプリングルドの腕を振り下ろすが、黒い一団の中の弾けなかった何本かが防御を突破してラーマの胸に突き刺さる。

「じぶっ！」

思わず口から漏れた息に、それとは別の息苦しさを感じてラーマは自身の肺に穴が空いたことに気付く。

吸っても膨らまぬ右肺により乱れた呼吸はラーマの動きを鈍らせる

のに十分であり、更にスプリングルドを動かしたことで生じた一瞬の隙を突かれて膝上あたりまでを一気に地面に引きずりこまれる。下半身は固定され、身動きが取れなくなったラーマは苦しくなる呼吸の中、この状況を決定づけた黒い針の使い手を睨みつけた。

「僕の黒き森シュヴァルトツバルトの威力はどうニヤ？」

そこには四本足の黒い猫の体躯とピンと立った尻尾、そして顔に大きな靴跡をつけたキャットマンが蔑むようないやらしい笑みを浮かべてラーマを嘲笑っていた。

それは、圧倒的弱者を前にしてその命で遊ぶ猫の残虐性が現たものであり、右胸の痛みとは関係のない冷や汗がラーマの頬を伝う。

「お前は本当に心底僕のプライドを踏みにじってくれたニヤ。死にたいと思える程じわじわと鬨り殺すのニヤ」

キャットマンは忌々しげにそう言った後、振り返りボンバーヘッドを見る。

同意を求めているその視線に、ボンバーヘッドはこの場に似合わない爽やかな笑顔と一緒に親指を立てた。

それを見たキャットマンは再びラーマに向き直り、前足を少し広めに開いて肘を曲げ背中が見えるように身体を斜めにする。それは猫が威嚇する時にするポーズだが、キャットマンが意図するところは違っていた。

「ハリネズミになるニヤ」

それはラーマの肺を穿った黒き森シュヴァルトツバルトの予備動作であり、それを放つ体

勢であった。

キヤットマンの背中から無数の黒い針がマシンガンのように連続してラーマに放たれる。

先ほどの比ではない量の針がラーマに襲い掛かり、ラーマは即断する。

“ スプリングルドを盾にする ”

多少の損害はやむを得ないものとして、自身の前面にスプリングルドを置き、最小限の被害にすべくできる限り遠く的位置で弾くと決意し、これから行われるであろう高速の人形繰りに備えて息を止める。

そしてスプリングルドを自身の前に出そうとした時、異変が起こった。

ドクンと心臓が一つ高鳴ったかと思うと、ラーマの全身が麻痺をおこして動かなくなる。

呼吸をすることするままならない。

苦悶の声すらあげれない。

必死に身体に力を入れるが、微かに身体が震えるだけで必要最低限な量の指すら動かない。

悔しさに歯噛みすることもままならないまま、ラーマのいた所に針の雨が降り注いだ。

第十六幕・黒き森・（後書き）

ビッグーの影響がやばいと思いつつもその手を緩めない、緩めるつもりがない。

続きはなるべく早く更新する予定です。

本当です。真面目です。信じてください！

第十七幕 - 変化 - (前書き)

Q : そんな更新速度で大丈夫か？

A : 大丈夫だ、問題ない。

そしてフルボッコされる。

第十七幕 - 変化 -

黒い雨が一つの生き物のように降り注ぎ、止んだ。残されたものは全身を針に貫かれ、頭を垂れて立ち尽くすラーマだった。

出血は少ない。それは針が極めて細微だからだ。だから死ねなかった。

無限とも思える一瞬に集約された鋭い痛みを全身に受け続けたラーマは、肉体は勿論のこと、その精神をひどく負傷していた。

気力を削がれ、抵抗の意思を奪われる。地獄のような苦痛の中から解放された安堵と、二度とそれを味わいたくないという恐怖。

ショック死のないしろがねにとって心を折るには余りある一撃であった。

「まだ終わりじゃないニヤ。いけ！」

更に追い討ちとばかりに自身の部下を向かわせるキャットマン。醜く歪んだ顔にはある種の恍惚が浮かんでいる。

掛け声に反応して、タキシードを纏ったキャットマンの部下達が無表情にスタートを切る。

その数11体。武器はなく、皆素手である。それぞれが最短距離を黒い線を描くように移動し、ラーマに迫る。

肝心のラーマはどこか鈍い光の虚ろな瞳で動かない。明確な殺気にも反応しないまま、何かできたであろうその時を無為に過ごす。

“不覚”まさにその言葉が似合う状態であった。混濁した意識の中、痛みだけがラーマの精神の中で明確に主張を繰り返す。

左腕、右胸、右頬、右側頭部、肝臓、右大腿、横隔膜、額。
ハンマーのような打撃が寸断なくラーマを襲い、足を固定された体が振り子のように揺れる。

最後の一撃が振り切られた時、ラーマの脳内に響いたものは、どこか厳しくも懐かしい女性の声であり、在りし日の思い出でもあった。

『……』

それは、遠くから木霊するようにラーマの頭の中に反響した。

『……ラーマ』

途切れ途切れのその声が一つの言葉となっていく。

『ラーマ、あなたは全くもって不器用な子だねえ』

暗く何も無い薄汚れた立方体の部屋。漆黒のドレスを着た女性が自身の両手を体の正面にある木製の杖に乗せたままため息と共にそう呟く。

その声はしわがれていた。だが、一本芯の通ったどこか凜々しい声であった。

例えるならば研き抜かれた名剣といったところであろう。積み重ねた時代の密度が感じられるような、重みを含んだ声である。

『泥臭いったらありやしなないよ。“しろがね”は人形使つて暴れりやあいいつてもんじやないのさ』

呆れたように零すその言葉はそこで一旦区切られる。

それは、出来の悪い生徒に言い聞かせる先生そのものであつた。

『いいかい？あんたも“しろがね”の端くれならよおくお聞き。“しろがね”てえのはね、もつと・・・』

そして、記憶の中の彼女はラーマを指差すと、ニヤリと口角を上げてふてふてしく笑い、諭すように、誇るように・・・

『スマートにやるもんさ』

そう語つた。

初めにその異変に気付いたのはキャットマンだつた。

いやらしく上がつていた口角がいつの間にか元に戻っていることに気付いたキャットマンは、嫌な予感を頭によぎらす。

気になつてただ棒立ちで殴られ続けているラーマを注視するも、それは今でも変わらない。だが、何か先程までと違うような気がしてならないのだ。

しかし勘などという不確定なものを根拠にできない人形故、それを口にすることはできない。そもそも、人形に勘があるのかどうか

自身にもわからないのだ。

何もできないもどかしさに軽く歯がみしながらも、キャットマンは臨戦体勢を整える。

異変はすぐに起こった。

ラーマを正面から殴り付けようとした部下が吹き飛ばされたのだ。

その部下はボールのように固い地面をバウンドし、キャットマンの足元に到達する。

思わずキャットマンはその部下に目をやると、再起不能になっているではないか。

体には五つの細い穴があいており、その穴は動力部を貫いている。

キャットマンは慌てて逸していた目をラーマに戻し、全神経を集中させる。

その時、ラーマがぼそりと呟いた。

「はい、ルシール先生」

第十七幕 - 変化 - (後書き)

就職難すぎて全てに絶望した。
そんな藤田さんに応援の一言を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3551/>

からくりサーカス外伝-銀の月-

2010年10月16日05時09分発行